

第 33 回 龍頭が滝案内

瀧神社は、どこにあったのか（その 1：『雲陽誌』を手掛かりに）

龍頭が滝には、かつて、瀧神社がありました。しかし、明治 40(1907)年 10 月 30 日に、松笠天満宮に合祀されたため、瀧神社のお社（やしろ）は、姿を消したと思われます。そこで、今回は、「合祀前の、瀧神社のお社は、龍頭が滝のどこらへんにあったのか？」ということテーマにして、その境内地（けいだいち）を探そうと思います。手掛かりは、享保 2（1717）年に成立した、出雲の地誌書である『雲陽誌』などや、龍頭が滝を描いた絵なども利用したいと思います。

瀧神社の境内地について、結論を先にいいますと、龍頭が滝にある石の階段を上ると、面積 9 坪ほどの平らな土地が、姿を現します。そこに、合祀前の、瀧神社のお社があったものと思われます。現在、ここには、石の台のようなものや、一組の石の基礎のようなもの、それから、飛び石と灯籠（とうろう）がありますが、これらは、瀧神社のお社に、関係するものだと思います（図 1）。

では、『雲陽誌』を読みながら、境内地の探索を始めたいと思います。『雲陽誌』は、龍頭が滝の様子について、「掛合より須佐への通路左の方」と書き始めます（下記の赤書き部分）。これは、「龍頭が滝は、掛合から須佐に向かう通路（往還といいます）の左のほうにある」と解釈ができます。実際、天保 3（1832）年ごろ作成されたとされる出雲国絵図（イズモノクニ エズ）では、掛合村から松笠邨（村）を通して須佐大宮に向かう往還（絵図では、赤い線で表示されています）の左側に、龍頭が滝が描かれています（図 2）。

この絵図をよく見ると、ノタ原、龍頭瀧、菅原という地名を見つけることができます。掛合一須佐間の往還は、掛合町郡（こおり）から、野田原を越えて松笠に入り、菅原を通して須佐神社に至っていたようですが、多根村に分岐する往還もあったようです。

さて、須佐に通ずる往還から、現在は龍頭橋が架かっているあたりで左に折れて、さらに進むと、龍頭が滝に到着します。『雲陽誌』は、龍頭が滝の光景を、「瀧坂をのぼり、華表の前より岩下にいたる」と描きます。（続く）



図 1

この『出雲国絵図』は、島根大学デジタルアーカイブ掲載のものを複製して使用し、一部分を加工しています。ノタ原、龍頭瀧、菅原、須佐大宮という名前が確認できます。



図 2

『雲陽誌』（抜粋）龍頭瀧 掛合より須佐への通路左の方瀧坂をのぼり、華表の前より岩下にいたる この所を龍頭と称して瀧あり 高さ三十三尋潭の深さもまた然りなり（中略）此邊幽壑の中に瀧明神の社石地蔵を安置す